

## 戦争論研究序説 (三)

- 一 問題意識
- 二 クラウゼヴィッツ 『戦争論』の刊行と翻訳
- 三 『戦争論』の序文類
- 四 詩人ハイネの見たプロイセン・ドイツ
- 五 ナポレオンの支配とプロイセン改革
- 六 軍制改革とクラウゼヴィッツ

植村秀樹

以上、第十八卷第二号（二〇一九年二月）

以上、第十九卷第一号（二〇一九年九月）

## 七 「戦争は他の手段による政治の継続」(一)

クラウゼヴィッツ『戦争論』といえは必ず持ち出されるのが「戦争は他の手段による政治の継続」という命題である。むしろこの言葉だけが——十分な考察の上でなく——独り歩きしてきたといえる。これまでの検討を踏まえ、この命題の検討を始めよう。これが最初に——個人的な書簡等に登場するかどうかは不明であるが、おそらくは——登場するのは一八二七年七月の「覚え書」である。そこでまずこの「覚え書」のドイツ語原文、ハワード・パレットによる英語訳、清水訳、最後に篠田訳の順に示しておく。

der Krieg nichts ist die fortgesetzte Staatspolitik mit anderen Mitteln<sup>(1)</sup>

war is nothing but the continuation of policy with other means<sup>(2)</sup>

戦争とは他の諸手段による継続した政治以外の何ものでもない<sup>(3)</sup>

戦争は政治的手段とは異なる手段をもって継続される政治にほかならない<sup>(4)</sup>

次に、これが「覚え書」に登場する文脈を確認しておこう。「すでに清書されている最初の六篇」の書き直しの必要性を痛感したクラウゼヴィッツは、「この書き直しの際に二種類の戦争ということが常に鋭く観察されるだろう」と述べている。その「二種類の戦争」とは、「敵対者を打倒することを目的とするもの」と「単

に敵対者の国境でなにかの侵略を企てること」の二つである。その直後に、「実践的に必要な見解を明瞭かつ正確におかねばならない。というのは戦争とは他の諸手段による継続した政治以外の何もものでもないということである」という文が来る。<sup>(5)</sup>つまり、「政治の継続」は「実践的に必要な見解」——注意すべきは、これは戦争の定義ではないということ——とされているのである。原文においても「praktisch notwendige Gesichtspunkt」である。<sup>(6)</sup>この一八二七年の「覚え書」の次にこの命題が『戦争論』に登場するのは、第一部「戦争の性質について」第一章「戦争とは何であるか？」第二四節の表題である。原文、ハワード・パレット訳、別の英語訳、そして清水訳を引用する。

Der Krieg ist eine bloße Fortsetzung der Politik mit anderen Mitteln<sup>(7)</sup>

War is merely the continuation of policy by other means<sup>(8)</sup>

War is a mere continuation of policy by other means<sup>(9)</sup>

戦争とは他の手段をもってする政治の継続にはかならない<sup>(10)</sup>

言葉遣いは微妙に異なるものの、一つの命題として見た場合、その意味するところは同一のものと判断して間違いなからう。表題に続いて、本文では次のような文章が来る。原文に続いて清水訳とハワード・パレット訳を並べておく。

So sehen wir also, daß der Krieg nicht bloß ein politischer Akt, sondern ein wahres politisches Instrument ist, eine Fortsetzung des politischen Verkehrs, ein Durchführen desselben mit anderen Mitteln.<sup>(12)</sup>

かくてわれわれは次のごとき原則を了解するに至った。即ち戦争は単に一つの政治的行動であるのみならず、実にまた一つの政治的手段でもあり、政治的交渉の継続であり、他の手段による政治的交渉の継続にほかならない<sup>(12)</sup>、ということぞ。

We see, therefore, that war is not merely an act of policy but a true political instrument, a continuation of political intercourse, carried on with other means.<sup>(13)</sup>

ここでは、政治との関係で戦争は、「政治的行動」「一つの政治的手段」「政治的交渉の継続」「他の手段による政治的交渉の継続」という四つの言葉で語られていることに注意したい。清水訳では件の命題を「原則」としているが、原文には「原則」に相当する、たとえばPrinzipのような語はない(ここは篠田訳のほうが原文に忠実——直訳に近いという意味で——といえるかもしれない)。ハワード＝パレット訳でもそうした単語を補充してはいない。

では、この命題は——「覚え書」と第一部第一章第二四節が同じことを述べているという前提に立つての上でのことであるが——一体何なのだろうか。少なくとも、戦争の定義とはされていない。戦争の定義はあくまで「戦争とは、敵をしてわれらの意志に屈服せしめることを目的とする暴力行為」である<sup>(14)</sup>。それでもこのテー

ゼが『戦争論』の鍵を握る重要なものであることに疑問の余地はない。クラウゼヴィッツ自身、同僚に宛てた手紙の中で、「戦争とは異なった手段をもつてする政治的努力の継続以外の何ものでもない。(…)この根本原則を通して全戦史が理解可能となる。この原則なしにはすべては全くばかげたものである」と述べている<sup>15</sup>。ここでは「根本原則」と訳されている。私はこの手紙の原文に当たったわけではないので、クラウゼヴィッツがどのように書いたのか正確なところは不明であるが、もしこれを戦争の定義としているのであれば、クラウゼヴィッツのことであるからそのように書いたのではないかと推察される。なにしろこの手紙は一八二七年十二月二十二日付、すなわち、「覚え書」の後であり、『戦争論』の完成に向けた最後の努力を始めた頃のものであることから、このように考えて間違いないであろう。「この根本原則を通して全戦史が理解可能となる」というところにクラウゼヴィッツの意図は明確に表現されている。つまりは原則であつて定義ではない。定義によつて戦史が理解可能となるといふのは、論理的に理解不能であろう。

この命題に対しては、「ルーデンドルフ独裁」で知られ、ヒトラーと通じて「ミュンヘン一揆」を起こしたルーデンドルフ (Erich Ludendorff) が猛烈な攻撃を仕掛けたことが知られている。もちろん、こうした態度はルーデンドルフひとりのものではない。おそらくはモルトケ (Helmuth von Moltke) あたりから本格的に広まるドイツ参謀本部内での『戦争論』に対する無理解や誤解、果ては歪曲の帰結がルーデンドルフなのだろう。この問題は後に追究したいと考えている。

次に、この命題が日本でどう扱われているか見てみよう。川村康之は「戦争とは、相手にわが意志を強要するために行う力の行使である」というのがクラウゼヴィッツの戦争の定義であるとしつつも、「次に暴力を使用する目的を考慮した場合、戦争は『他の手段をもつてする政治的交渉の遂行である』と定義される」、さらに、「彼は戦争を定義して『戦争は他の手段をもつてする政策の継続に過ぎない』と述べている」としている<sup>16</sup>。

川村は別の書物でもこれを「『戦争論』における戦争の定義のもっとも代表的なもの」としている<sup>(17)</sup>。このように、川村は「政治の継続」も戦争の「定義」としているのである。戦争の定義が複数あるというのはどういふことなのか。理解に苦しむ。こうなると、「定義」という言葉の定義が求められることになりそうである。ついでながら、黒野耐も「クラウゼヴィッツは、戦争は政治目的達成のための手段であると定義し」と、川村と同じくこれをクラウゼヴィッツの戦争の定義と理解している<sup>(18)</sup>。

これに対して、ハワードは、この命題について「人生の最後にクラウゼヴィッツは有名な結論に到達した」と、「結論」(conclusion)と表現している<sup>(19)</sup>。また、アロンもこれを定義とはしていない。アロンは「戦争は他の手段による政治の継続である、という、この幾度となく誤って解釈された定式」として、これを「定式」と呼ぶとともに、「この語句を、これから定式の語で示す」とわざわざ注を付している<sup>(20)</sup>。この部分はフランス語原文では「La Formule, la guerre, continuation de la politique par d'autres moyens」であり、注でも同じく「Formule」と大文字にしている<sup>(21)</sup>。「定式」はFormuleの訳語として用いられているが、そもそもフランス語のformuleは概ね英語のformulaと同じ意味——決まり文句、定型表現、ひな形、公式、など——で用いられるものであり、宗教における信条、教義といったものを指すこともある。ドイツ語にもこれに相当すると思われる「Formel」という語があるが、少なくともこれまでのところは登場していない。このテーゼに対するアロンの扱い——すなわちこれを「定式」と呼ぶこと——が適切であるならば、清水訳が「原則」という語を補ったのも翻訳としては適切といえることになろう。ハワードの「結論」も同様に納得のいくものである。

それはさておき、アロンがこれを「定式」(formule)として——「定義」(definition)とはせず——注まで付して注意深く扱っていることに留意したい。アロンのクラウゼヴィッツ論はあらためて論じることにするが、このテーゼの意味とその位置づけ——戦争の「定義」なのか、それとも「原則」あるいは「定式」とすべきか

——は、『戦争論』を理解するうえで極めて重要な問題のひとつであることは疑いのないところである。したがって当然ながら、クラウゼヴィッツの思想と『戦争論』の方法論の形成過程を辿らなければならないことになる。先に紹介したように世界の碩学が「戦争哲学者」とクラウゼヴィッツを呼ぶ所以もこのあたりにありそうである。そこで、これが定義であるか否かという点だけはここではつきりさせておきたい。

既に述べたように、クラウゼヴィッツはこの第一部第一章だけは完成したものと自ら述べている。この言葉を尊重するならば、この章の構成にもクラウゼヴィッツの戦争分析の論理および展開、そしてその到達点が表れているかもしれない。そこでいささか長くなるのを厭わず第一章を構成する二十八の節の表題を並べてみることにする（清水訳）。

- 一 序論
- 二 定義
- 三 暴力の無制限な行使
- 四 目標は敵の抵抗力を粉碎することである
- 五 力の無制限の發揮
- 六 現実における修正
- 七 戦争は孤立した行動ではない
- 八 戦争は継続することのないただ一回限りの決戦ではない
- 九 戦争とその結果は絶対的なものではない
- 一〇 概念の無制限性と絶対性とに代って現実生活の蓋然性が問題になる

- 一一 ここにおいて政治目的が再び立ち現われる
- 一二 軍事行動の停止は以上の論究によつてはまだ説明されていない
- 一三 行動を停止せしめ得る原因はただ一つだけである。しかしてこの原因は常に一方の側にのみあるように見える
- 一四 軍事行動はここに至つて連続性を得、これはまた再び相互の行動を煽り立てることになる
- 一五 両極性の原理について
- 一六 攻撃と防禦とは異種のものであり、強弱を異にするものである故に、両極性を適用することはできない
- 一七 両極性の作用はしばしば防禦が攻撃よりも優れているがために消滅し、かくて軍事行動の停止が成立する
- 一八 軍事行動停止の第二の理由は敵状を把握することの不完全さにある
- 一九 軍事行動の停止が重なるにつれ、戦争はますます絶対的なものから遠ざかり蓋然性の推測法に近づいてゆく
- 二〇 これまでの叙述には戦争に賭の性質を与える偶然性への反省が欠けていた。しかも実際の戦争はこの性質を多分に担っているのである
- 二一 戦争はつとに客観的性質上賭であるのみならず、また主観的性質上からも賭である
- 二二 戦争の以上のような性質は、一般に人心にかなつたものである
- 二三 しかしながら戦争は常に真面目な目的に対する真面目な手段である。戦争の一層詳細な規定について
- 二四 戦争とは他の手段をもつてする政治の継続にほかならない
- 二五 戦争の種類は数多くあるということ



二六 戦争には数多くの種類があるが、それらはおしなべて政治的行動として見なされ得る

二七 以上の議論から戦史を理解し、兵学理論を基礎づけるための観点が得られる

二八 兵学理論のための結語

このように表題を並べてみるだけでもクラウゼヴィッツの論理の展開を辿れそうである。少なくとも、クラウゼヴィッツは、戦争の定義から始めて、やがて「政治の継続」に行き着いたのであり、ここに到達したことで、戦史の理解、そして軍事理論の構築に向かえると考えた、と推察され得る。ただし、これは表題の展開からの推測に過ぎず、本文の詳細な分析と検討を経ることなく結論に飛びつくような真似は慎まなければならぬ。このことを十分に踏まえたとしても、やはり「政治の継続」は、明らかに定義ではないこと、何らかの展開によって辿り着いた認識を簡潔に表明した命題であると結論づけることができる。とりあえずここでは、これを「定式」「結論」「原則」のいずれか、あるいはこれらを包括する何らかのものと理解しておきたい。

## 八 クラウゼヴィッツと哲学 (一)

クラウゼヴィッツを哲学者と評する碩学が多いと述べたが、その一方で、これもすでに述べたように、フランス現代思想研究者の西谷修は、クラウゼヴィッツ『戦争論』は哲学とは無縁だと断定していることをあらためて確認しておきたい。<sup>22</sup>これはクラウゼヴィッツの経歴や『戦争論』執筆の経緯などをまったく理解していない——さらに言えば、「哲学的に考察」するとはどういうことかについても、思想研究者であるとはわかに信じがたいほどの浅薄な理解にとどまっている——というほかない。断るまでもないことであるが、「哲学的

に考察」するとは、叙述において「深い瞑想」を展開することでもなければ、哲学を「引用して」述べることもなからう。このような西谷を私は次のように評した。

西谷は『戦争論』を「近代戦争の本質を規定し、『絶対的戦争』の概念を打ち出したもの」としているように、典型的な「俗」流の誤解をしており、クラウゼヴィッツをほとんど理解していないと断ぜざるを得ない。<sup>(23)</sup>

さて、本題に入ろう。クラウゼヴィッツはどのようにして、どのような哲学的思考を身につけたか。それを探るには、何はともあれ、クラウゼヴィッツの生い立ちと教育歴にその手掛かりを求めてみよう。クラウゼヴィッツが学んだベルリンの士官研修所では、カント哲学の普及に一役買ったとされるキーゼヴェッター (Johann Gottfried Kiesewetter) が数学と論理学担当の教授を務めていた。パレットも「キーゼヴェッターはクラウゼヴィッツが哲学的方法に関心を抱くことに強い影響を与えた」としている。<sup>(24)</sup> ということは、カント哲学あるいはその認識方法を何らかのかたちで——直接的であれ、間接的であれ——学んだということであろう。キーゼヴェッターを通じてカント哲学に接したとパレットも述べている。それにとどまらず、パレットによれば、クラウゼヴィッツは「天才」の概念を当時のドイツ啓蒙思想から学んだとのことである。<sup>(25)</sup> カントやキーゼヴェッターを通じて「軍事的天才」というクラウゼヴィッツ戦争論において重要な概念の着想を得たというのはきわめて興味深い。

では、クラウゼヴィッツはカント哲学を——キーゼヴェッターを通じてであれ——自らの認識方法として身につけ、それを戦争研究に応用したと理解していいのだろうか。ここで、カントの主要な哲学的著作とそれら

が刊行された年を確認しておこう。『純粹理性批判』第一版は一七八一年に出しており、同第二版は一七八七年である。『実践理性批判』(*Kritik der praktischen Vernunft*)は翌一七八八年、さらに二年後の一七九〇年に『判断力批判』が刊行されて、いわゆる三批判書が出揃った。もちろん、これらに前後して出版された『プロレゴメナ』や『人倫の形而上学』(*Die Metaphysik der Sitten*)などに接した可能性も否定できない。

一方、クラウゼヴィッツはヘーゲル哲学の影響を受けているのではないかという指摘もしばしば目にするところがある。ヘーゲルはカントの影響の下に自らの哲学を構築し、ドイツ古典哲学(観念論)の完成者とされているが、その主要著作を見ると、『精神現象学』(*Phänomenologie des Geistes*)は一八〇七年、『大論理学』(*Wissenschaft der Logik*)は一八二二―一六六年、『法哲学』(*Grundlinien der Philosophie des Rechts*)は一八二一年に刊行されているところから、クラウゼヴィッツが何らかのかたちでこれらに接した可能性は否定できないものの、パレットはヘーゲル哲学の影響については否定的である。ヘーゲルがベルリン大学教授に就任するのは一八一八年のことであるが、ちょうどクラウゼヴィッツが『戦争論』の執筆に本格的に取り組み始めた頃である。つまり、ヘーゲル哲学が全盛期を迎える前にクラウゼヴィッツは基本的な思想や方法論の形成を終えていたと考えられるのではなからうか。このように、最も強くクラウゼヴィッツの思想や思考方法に影響を与えたのはカント哲学と考えるのが妥当であるように思われる。<sup>27</sup>

しかしながら、パレットは慎重に、クラウゼヴィッツの戦争論が方法論において直接的にカント哲学をその基礎にしているとは述べていない。パレットによれば、概ね次の通りである。クラウゼヴィッツは哲学的志向が強いものの、きわめて実地的な手段として用いている。事実を観察し、それを論理的に秩序立てていくという推論の方法をカント哲学から学んだのは確かであろうが、そうしたクラウゼヴィッツへの哲学的、認識方法論的な影響をカントに限定するのは適当ではない。カントやその後継者を含む当時のドイツ哲学全般から戦争

を論理的に探究する方法を構築したと見るべきである。また、アウエルシュテット会戦前、数年間のベルリン滞在中にクラウゼヴィッツは、戦史の研究のみならず、広範囲にわたる読書に勤しんだ<sup>28</sup>。その中には、マキアヴェッリ (Niccolò Machiavelli) やモンテスキュー (Charles-Louis de Montesquieu) も含まれており、この時期の読書——この当時、クラウゼヴィッツは二十歳代前半である——から思想的、方法的な影響を受けた可能性も大いに考えられるであろう。この中でも、とりわけマキアヴェッリの国家論は、クラウゼヴィッツの国家観との共通点が認められ、マキアヴェッリから影響を受けたように思われる。モンテスキューについては後の課題としたい。

パレットは、クラウゼヴィッツは特に哲学の訓練を受けたわけではなく、カントやフィヒテの著作を読んだかどうか不明であり、当時のドイツ哲学のうち、特定の系統をクラウゼヴィッツに結びつけることはできないとしている。その当時よく読まれていた本を通してその時代の思想に接していたという意味でクラウゼヴィッツも通常の「時代の子」として見るべきであり、その限りでドイツ観念論哲学や後期啓蒙主義思想などとの結びつきを理解すべきだ<sup>29</sup>というのである。クラウゼヴィッツと哲学との関係について考える際に念頭に置いておくべきことのひとつは、当時の哲学における認識方法として考えられるのが弁証法だということである。テーゼとアンチ・テーゼの対比によって事象への認識に至るのが弁証法とされているが、とはいえクラウゼヴィッツが親しんだのは、先に述べたようにヘーゲルのそれとは異なるカント哲学とその弁証法(超越論的弁証論)であろう。つまり、クラウゼヴィッツ『戦争論』を理解するためには、カントに代表される当時のドイツ哲学の認識方法を常に意識して読み進める必要があるということになる。

## 九 リデルハートの『亡霊』

『ナポレオンの亡霊』(The Ghost of Napoleon) について立ち寄っておきたい<sup>(30)</sup>(以下、『亡霊』と略記する)。これは、「間接的アプローチ」を提唱した『戦略論』などで日本でもよく知られているイギリスの軍事史研究者、ベイジル・リデルハート(Basil Henry Liddell-Hart)が著したものである<sup>(31)</sup>。これまで長きにわたって誤解・曲解に基づく故なき非難を浴びせられてきたクラウゼヴィッツ『戦争論』を正確に読み解くために、いささか唐突の感はあるものの、カントの哲学やモンテスキューの思想などと『戦争論』との関係の解明に進む前に、この『亡霊』を繙くことは有用であると思われるからである。

陸軍将校として第一次世界大戦に赴いた経験を持つリデルハートが戦間期の一九三三年に出版したのがこの『亡霊』である。リデルハートは若いころから軍事史に強い関心を寄せていたが、ケンブリッジ大学進学後に勃発した第一次世界大戦に加わるために陸軍に志願し、臨時将校となって西部戦線に派遣された。実際の戦場にいた期間は合わせても数週間程度であり、特段の戦功を挙げたわけでもなかったが、大戦後も陸軍に籍を置き、一九二七年に大尉で退役した。その後は戦史研究者として著述に専念することになる。その後、一九四〇年代には軍事専門家として名声が失墜する事態も迎え、衣装やファッションの専門家への転身も考えたこともあったが、生涯を終えるまで、軍事や戦争に関する著述家にとどまった<sup>(32)</sup>。

さて、『亡霊』であるが、クラウゼヴィッツに関して再三にわたって強調していることがあり、これがリデルハートのクラウゼヴィッツに関する評価の要点となっている。それは、クラウゼヴィッツが兵力の大量集束と相互破壊を唱道したということである。そもそも第一次世界大戦が勃発し、臨時将校としての出征前後の一九一四年十一月から翌年初めにかけて、次のようなメモを残している。

私は絶対平和は真の意味での男性らしさにとって有害であると固く信じているが、二十世紀の戦争はあまりにも恐ろしい。仮にこのような爆発的ともいえる恐怖がないままに戦争ができれば、戦争も悪くない。

軍隊での生活こそ男性にとつての唯一可能な理想であり、男性のもっとも優れた特性を導き出すものである。<sup>(33)</sup>

このようになりに楽観的に戦争と軍隊を捉えていたリデルハートであったが、しかし、その後長く続くこの戦争は、悲惨な塹壕戦に象徴されるように、人類がかつて経験したことのないほどの死傷者を出すものとなった。それがリデルハートの態度を変えさせた。ヨーロッパ全土に底知れぬ悲劇をもたらしたこのような戦争は、いかにして起こり得たのか。その責任の大半をリデルハートはクラウゼヴィッツとその追隨者に求めた。すなわち、「適正なバランスへの配慮を欠いた大量集中 (mass) の新しい理論」がこのような戦争を導いたというのである。<sup>(34)</sup> 「大量集中と相互殺戮の救世主」——リデルハートはクラウゼヴィッツをこう名付けた。<sup>(35)</sup> 兵力の大量集中が相互殺戮を必然的に導くのは、そこに「絶対戦争」(absolute war) の概念——概念に止まらずそれが戦略となる——が媒介するからというのである。

(クラウゼヴィッツは) 「絶対戦争」ドクトリンの発案者である。<sup>(36)</sup>

リデルハートは執拗なまでにクラウゼヴィッツが「絶対戦争」概念とその戦略の創始者にして唱道者であり、ドイツをはじめとするヨーロッパの将軍たちに影響を及ぼしたその果てに第一次世界大戦の悲劇が起きたと主

張する。『亡霊』からの引用をもう少し続けることにしよう。

無制限かつコスト計算を無視したクラウゼヴィッツの原理は、ただ憎悪に荒れ狂った暴徒にのみ相応しいものである。それは政治手腕の否定であり、また政策目的を追求しようとする知的な戦略の否定でもある。

敵軍勢力の破壊が唯一絶対の戦略の目的であるとする思考を展開した——作り出したのではないとしても——のはクラウゼヴィッツである。遂行する意味のないことを教義にまでしてしまったのは、純粹な論理への彼の情熱がそうさせたのである。<sup>(37)</sup>

このような論理を展開したクラウゼヴィッツの「極端へと向かう」傾向はそれにとどまらず、第一次世界大戦の結末を表す予言めいたことを言い残したが、その「哲学的曲芸」にほとんどの読者は翻弄され、論理の微妙な綾を把握し得なかつた、トリデルハートは言うのである。<sup>(38)</sup>

クラウゼヴィッツ自身には直接的な、そして間接的な責任もある。というのは、現実が抽象的観念に何らかの制限 (limitations) を加えることを認めながらも、抽象的観念を実際の戦争を指揮する上の理想としていたからである。<sup>(39)</sup>

「絶対戦争」の概念こそは、クラウゼヴィッツのドクトリンの要石となっており、それが最も極端かつ非現実的な思想への貢献であった。<sup>(40)</sup>

この「絶対戦争」は、相対する一方が抵抗を持続する能力の尽きるまで戦うものであり、勝者までも力を使い果たし限界に達するという「指揮官がとどまるべきところの分らない」ものであって、「理性の支配を奪う」のだとリデルハートは言う。たとえば、第一次世界大戦のマルヌ会戦におけるドイツの敗戦、すなわちシュリーフェン・プランの失敗を、リデルハートは、クラウゼヴィッツの亡霊、すなわち大量集中理論によるものとしている。しかし、そもそも第一次世界大戦のような世界的な巨大な出来事に対して、前世紀の一人の理論がヨーロッパの軍事指導者を金縛りにし、誰もそれを止めることができなかつたという歴史理解はいかなるものか。また、シュリーフェン・プランの問題点は、戦争遂行のために純軍事技術の面ばかりを追求し、そのために政治を軍事に従属させてしまったことであつたのではないだろうか。クラウゼヴィッツの「戦争とは他の手段をもつてする政治の継続」という定式とは反対のように見える。この点も後に検討するとして、クラウゼヴィッツはひたすら「絶対戦争」の遂行を唱えていたのかというと、そうばかりではないと、ここはリデルハートもいささかの慎重さを見せている。先に引用した部分に含まれていた「制限」(limitations)とともに、次の記述にも目を留めたい。

クラウゼヴィッツは十分な常識と歴史的な判断力をわきまえていたので、「現実における緩和(modification)」と彼が呼ぶものを認めていた。<sup>(4)</sup>

これらの記述に登場する「制限」なり「緩和」は、大量集中理論と大量殺戮の「救世主」にして「絶対戦争」の唱道者という、リデルハートの描くクラウゼヴィッツとどのような関係にあるのだろうか。また、リデルハートは後にクラウゼヴィッツ批判をいささか修正したさらいがある。後の著書に現れる次のような見解は



それを示していると考えられる。批判の矛先はクラウゼヴィッツだけでなく、あるいはクラウゼヴィッツ自身よりもむしろ後世の軍人たちに向けられているようにも見受けられる。

献身的ではあるが理解力の足りない弟子たちは、師の所説に対する反対者の偏見や愚見以上に、師の創造的な見解を曲解し、これを損なうのが通例である。

〔普通の軍人たちは〕しばしばクラウゼヴィッツが目ざしていた方向とは逆に理解した。彼らは師から深い感作を受けながらも混乱させられ、生き生きとした見出しの言葉に飛びつきながらも表面的な意味をなぞるだけで、彼の思想のもっとも深い意義を見のがしてしまったのである。<sup>(42)</sup>

さて、払い除ける——または、「祓い除ける」——べきは、「ナポレオンの——これはリデルハートの所説に従うならば、正確には「クラウゼヴィッツの」ということになるのだから——亡霊なのか、それともリデルハートの亡霊なのか。」「絶対戦争」と現実によるその制限ないし緩和といった概念的な問題とともに、クラウゼヴィッツを読む上で必要不可欠な注意点が明らかになった。そして、もうひとつ、リデルハートは重要な指摘をしている。先に引用した箇所において、次のように述べている。

クラウゼヴィッツが、それまでのいかなる軍事思想家たちよりも誤解を招きやすい説を述べたことは認められるべきである。カントの所説をまた聞きした弟子としてのクラウゼヴィッツは、真の哲学的知性を涵養することもないまま、しかし哲学的表現様式だけは身につけていた。彼の戦争理論はあまりにも抽象

的で複雑な形でのべられていたので、あくまでも具体的にものを考える普通の軍人たちは、正しく読みとることができなかつた。<sup>(44)</sup>

この指摘が的を射たものなのかどうかは今のところ不明と言わざるを得ないが、リデルハート自身も『戦争論』を誤読している可能性が高いことは指摘しておかなければならない。例の「戦争は政治の継続」をリデルハートは、クラウゼヴィッツによる「戦争の定義」(definition of war)として、<sup>(45)</sup> いることからも明らかである。いづれにしても、クラウゼヴィッツ『戦争論』を正しく理解するためには、その背景にある哲学的要素——方法論、論理的構成及び記述、表現の仕方など——について十分な注意を払う必要があることがあらためて確認できた。

## 十 レイモン・アロンと『戦争論』

社会学者にしてフランスを代表する保守思想家のレイモン・アロンが『戦争を考える——クラウゼヴィッツ』を著したことはすでに述べた。「原子爆弾の出現に誰もが恐怖を覚え啞然とした」第二次世界大戦中もその後も、戦争について、また、戦後の米ソ(東西)冷戦と核兵器の国際政治における意味についても、アロンは並々ならぬ関心を寄せていた。ソルボンヌ(パリ大学)では国際関係論を講じ、それはやがて『国家間の平和と戦争』に結実するが、その際、「平和と戦争の循環を通しての国家間関係の継続性、外交と戦略の相互補完性、目標達成又は利益擁護のために国家が用いる暴力的または非暴力的手段」といった「国家関係理論の萌芽ともいえる理念をクラウゼヴィッツから得た」という。<sup>(46)</sup> しかし、これに先立って、そもそもアロンは戦争に

ついで次のような考えを持っていた。

第二次大戦中、私はつねに戦争を嫌悪していたが故に、かえって私自身、および大学知識人のすべてが国際関係、ことに戦争の研究をまったくしてこなかったことで、深い自責の念にかられた。われわれが恐るべき戦争の唯中にあつたとき、私は知識人、あるいは教授連中が、歴史を通じて重大な役割を演じた社会問題の研究をなおざりにしてきたのは恥知らずなことだ、と考えたのである。<sup>(47)</sup>

そのアロンがクラウゼヴィッツ『戦争論』をテーマに大著に取り組む決意を後押ししたのは、イタリアの哲学者クロロチェ (Benedetto Croce) の次のような言葉だったという。

哲学者たちの平均的教養の狭隘さと貧困、また愚かな専門化、はつきりいえば彼らの精神の習慣が原因で、クラウゼヴィッツの著作のような書物が哲学者たちの関心の外にあり、忘れ去られていたのだ。

こうして「哲学者の好奇心をそそる」魅力を持つ『戦争論』研究に取り掛かることとなった。その際、アロンは「クラウゼヴィッツの哲学の方法論を明確にすること」をその研究の目的のひとつに選んだのだ<sup>(48)</sup>。つまり、アロンは単に戦争や戦略に関する著作としてのみならず、哲学者として、『戦争論』の哲学的側面に関心を寄せたのであった。一九七一、七二年度のコレージュ・ド・フランスにおける講義をもとに、その後、一九七五年にかけて「活発に、ほとんど熱狂的に」<sup>(49)</sup>「クラウゼヴィッツをめぐるスコラ的研究に沈潜した」結果として出来上がったのが先の著作というわけである。

さて、ここでのさしあたりの関心は、クラウゼヴィッツと哲学の関係である。この点に関して結論を急ぐと、アロンは「クラウゼヴィッツの弁証法はヘーゲルに依っていたらどうか」との問いに対して、明確に「否定的な判断」を下したと回顧している。「<sup>97</sup>極限的概念<sup>98</sup>の定義つまり戦争が極限に達する時点での定義は、ヘーゲル的ではありえない」とアロンは判断しているのである。<sup>99</sup>では、キーゼヴェッターの講義を受けたという通り、その師であるカントの哲学がクラウゼヴィッツの哲学的基礎なのであるか。アロンは『回想録』ではそのようには明確には述べていない。詳しくは『戦争を考える』を検討しなければならない。

注

- (1) Clausewitz, *Vom Kriege*, S. 179.
- (2) Clausewitz, *On War*, p. 69.
- (3) 『戦争論』上巻、九ページ。
- (4) 篠田訳『戦争論』上巻、一四ページ。
- (5) 『戦争論』上巻、九ページ。因みに、篠田訳では「実際に必要な観点」となっている(同前)。
- (6) *Vom Kriege*, S. 179.
- (7) *Ibid.*, S. 210.
- (8) *On War*, p. 87.
- (9) Clausewitz, *On War* (Penguin Books, 1982), p. 119.
- (10) 『戦争論』上巻、四三ページ。
- (11) *Vom Kriege*, S. 210.
- (12) 『戦争論』上巻、四三ページ。

- (13) *On War*, p. 87.
- (14) 『戦争論』上巻、一九ページ。
- (15) フェルスター、前掲論文、三七五ページ。
- (16) 野中郁次郎編著『戦争論の名著——孫子、マキアヴェリから現代まで』（中央公論新社、二〇一三年）、六一、六九ページ。
- (17) 川村康之編著（戦略研究学会編）『戦略論体系②クラウゼヴィッツ』（芙蓉書房、二〇〇一年）、五四ページ。
- (18) 黒野耐『戦争学』概論』（講談社、二〇〇五年）、九七ページ。
- (19) Howard, *Clausewitz*, p. 34.
- (20) レイモン・アロン（佐藤毅夫訳）『戦争を考える——クラウゼヴィッツとその時代』、三ページ。
- (21) Aron, *Penser la guerre, Clausewitz I*, p. 10.
- (22) 西谷「夜の鼓動にふれる」、八二ページ。この点については次を参照のこと。植村「平和国家と戦争論」、一〇ページ、植村秀樹「戦争論研究序説（一）」、『流経法学』第十八巻第二号（二〇一九年二月）、一三—一四ページ。
- (23) 植村「平和国家と戦争論」、一〇ページ。
- (24) Paret, *Clausewitz and the State*, p. 69.
- (25) *Ibid.*, pp. 154fn, 161-162.
- (26) *Ibid.*, p. 84fn.
- (27) シェルンホルストラによるプロイセン軍制改革にも深くかかわったポイエンも学生時代は「カント哲学に深く傾倒する哲学青年であった」という。この時代のプロイセンを包んでいた知的雰囲気は彷彿とさせる。鈴木直志「プロイセン軍制改革——概観と展望」清水多吉、石津朋之編『クラウゼヴィッツと「戦争論」』、一七八ページ。
- (28) Paret, *op. cit.*, pp. 81, 84, 149.
- (29) *Ibid.*, pp. 150-151.
- (30) Basil Henry Liddell Hart, *The Ghost of Napoleon* (Faber & Faber, 1933), 翌一九三四年にイェール大学出版部から刊行された版を底本とする翻訳がある。石塚栄、山田積昭訳『ナポレオンの亡霊——戦略の誤用が歴史に与えた影響』（原書房、

- 一九八〇年)。
- (31) Liddell Hart, *Strategy* (second revised edition, Faber & Faber: 1967), 森沢亀鶴訳『戦略論』上・下(原書房、一九七一年)、市川良一訳『リデルハート戦略論——間接的アプローチ』上・下(原書房、二〇一〇年)。
- (32) リデルハートの経歴については、石津朋之『リデルハートとリベラルな戦争観』(中央公論新社、二〇〇八年)、第一―第四章を参照。
- (33) 同前、二九ページ。
- (34) Liddell Hart, *The Ghost of Napoleon*, p. 101
- (35) *Ibid.*, p. 120, see also, pp. 128-129.
- (36) *Ibid.*, p. 120.
- (37) *Ibid.*, p. 122.
- (38) *Ibid.*, pp. 124-125.
- (39) *Ibid.*, p. 124.
- (40) *Ibid.*, p. 143.
- (41) *Ibid.*, p. 123.
- (42) Liddell Hart, *Strategy* (second revised edition, Meridian, 1991), pp. 339-340. 『リデルハート戦略論』下、二八六ページ。石津朋之は、この引用の前者について、「クラウゼヴィッツ批判のトーンが弱まっている」と指摘している。同編著『戦略論体系④リデルハート』(芙蓉書房、二〇〇二年)、四八ページ。
- (43) 石津によれば、「リデルハートが、クラウゼヴィッツの『戦争論』を一度でも精読したことがあったか否かについては、今日でも不明」とのことである。「ドイツ語をほとんど読めなかった」リデルハートは、果たして『戦争論』を正しく理解できたろうか。この点に関して、重要なこととして、当時の『戦争論』英語版事情がある。当時の英語版、すなわち「いわゆるグラハム版」には「相当の問題が含まれていた」といわれている。石津『リデルハートとリベラルな戦争観』、一三八ページ。この「グラハム版」とはCol. J. Grahamによる翻訳を指すものと思われる。私の手許にあるペンギン版もこれである。やはり、

- 『戦争論』の英語訳はハワード・パレット訳のプリンストン版を利用すべきであろう。
- (44) Liddell Hart, *Ibid.* 『リデルハート戦略論』、同前。
  - (45) *Ibid.*, p. 353.
  - (46) レイモン・アロン（三保元訳）『レーモン・アロン回顧録』2（みすず書房、一九九九年）、四八六―四八七ページ。
  - (47) レイモン・アロン「日本語版によせて」同『戦争を考える——クラウゼヴィッツと現代の戦略』、一。
  - (48) 『レーモン・アロン回顧録』2、六九三ページ。
  - (49) 同前、六八一、六九四ページ。
  - (50) 同前、六九九ページ。